

雲在青天水在瓶

くも せいてん あ みず へい あ
雲は青天に在り 水は瓶に在り
(『景德伝燈録』)



八月も半ばとなりました。お寺にも、お盆のお詣りの方が大勢お見えです。皆様、いかがおすごしでしょうか。さて、今回の禅語です。

くも せいてん あ みず へい
雲は青天にあり、水は瓶にあり

中唐の文人、李翱は、朗州（湘南省常德県）の刺史（知事）として赴任すると、その名声を聞き及び、法話を頼むために薬山惟儼禅師（745-828）の許を訪れます。

既に何度も使いを出して懇願したにもかかわらず、禅師からの返事はなく、仕方なしに知事である李翱みずから、薬山の庵を訪ねてきたのです。しかし、刺史（知事）直々の訪問に対しても、薬山は読経に専念するばかりで、出迎えも、応対もしません。

さすがに無礼だと腹を立てた李翱は、「面を見んよりは、名を聞くに如かず」と言い放ちます。「名声ばかりで、何だ、会ってみたら、つまらん坊さんじゃないか...」というところです。

すると薬山は、「太守、なんぞ耳を貴んで、目を賤しむることを得たる」と答えます。「知事よ、あなたはどのようにして評判ばかり重んじて、自分の眼を信用されないのですか...」というのです。

さて、名声や評判ばかりを信じていて、そんな先入観の中で、本当に相手に出会うことなどできるのでしょうか？

「面を見んよりは...」と李翱は言いましたが、果たして本当に薬山の本当の顔、「本来の面目」に見えることができたのかどうか...

どんな名声も、評判も、噂も、しよせんは伝聞に過ぎません。人と出会うのであれば、ちゃんと自分で足を運んで、一対一で顔と顔とをつきあわせ、真剣に向き合わなければ、本当のところは分からないので

す。そんな真剣勝負の場所に、評判や名声、地位や権力、見てくれは、必要ありません。思い込みや先入観も捨てて、素っ裸にならなくては何も見えないのです。

季^{りこう}翺は、さすが、なかなかの人物です。すぐさま胸に手を当てて非^{ひれい}礼を詫^わび、居^いずまいを正^{ただ}して問いかけます。

「如何なるか、是^いれ道^か」... 人の生きていくべき道^{こ どう}とは、どのようなものでございましょうか？

薬山^{じんびん}は一方の手で天を指さし、もう一方の手でそばにあった浄瓶を指さして言います。「会^えすや」... どうだ、分かったかな...

季^{りこう}翺は素直に答^ええます。「会^えせず」... 分かりません...

薬山^{くも せいてん みず へい}は言^いいます「雲は青天にあり、水は瓶にあり」...

見なさい、雲は青空いっぱいにはひろがっているではないか... そして、水はこうして瓶^{かめ}に収まっているではないか...

雲は空に浮かんでいるものだ... 瓶は水を入れる入れ物だ... そんなことは、誰でも「知^ちって」います。しかし、そんな「知^ち識」など、問題ではないのです。しっかりと天を見上げ、自分の眼で青空に浮かぶ真^まっ白な雲を見なさい... 目の前^{かめ たた}にある瓶の中に湛えられている澄んだ水を、自分の眼でちゃんと見なさい... 何よりもまず、自分の眼で見、自分の耳で聴きなさい...

「如何なるか、是^いれ道^か」... わたしたちが生きていく、そのあるべき道とは... それは、そもそも、人に訊くべきものではないのです。

季^{りこう}翺は、ハッと気づくところがあったのでしよう。この時の経^{きん}験を詩に^しして、こう歌っています。

我^{われ}来^きたって道^{みち}を問^とうに余^よ説^{せつ}なし 雲^{くも}は青^{せいてん}天^{てん}にあり、水^{みず}は瓶^{へい}にあり...

そう、道^{みち}を尋^{たず}ねても「余^よ説^{せつ}なし」余^よ計^{けい}なことはいら^いないのです。ただ、青くひろがる天には白雲が浮かび、目の前^{た た}には水^{かめ}を湛^たえた瓶がある... それを見るだけのことなのだ...

修行とは、「ただ」観ること、「ただ」聴くこと... この「ただ」を学ぶ修行なのです。

